

第12号

アクトス

文芸集団 ACTOS

平成二十三年十一月

アラトスの夢の世界にたゆといし書籍の海の吾ひとしづく

大西亥一郎

※アラトス(Aratos)は、紀元前三世紀に活躍した古代ギリシアの詩人。古代マケドニアで活躍。ギリシア神話の記述者。

はじめに

文学は文楽である。

日記は、それが結果として自己以外の人の心に響くメッセージか否かによって、文学と峻別される。言葉は命である。その言葉を、文学は文字という記号を媒体として表出する。記号である故に、その構成と判別に知性と経験を必要とする。とともに、組み合わせられた記号は、その記号以上の意味と感情を含み、一定の時間と空間に影響を及ぼすものとなる。

それを踏まえつつ、事実の伝達のみでなく人の思考・情感を伝えるもの、それが文学の誕生である。

したがって、文学は、いかなる形であれ、驚き・感動・好奇心・悲哀という「心を動かす」「心に響く」ものでなければならぬ。「文学は文楽である」という意味の「楽しさ」はそういうことである。

また文学は文芸であり芸である。良いものを取り入れて「消化して昇華」し、作家として常に技能内容を高めねばならない。

本誌は文芸活動を通じて文化芸術の振興と、それが個々の人生の糧となるように努めるアクトス集団の機関誌である。ために相互の研鑽・理解を深め、よりよい創作活動と、豊かな生涯を形成する内容を目指す。

本誌の構成は、短詞型(詩・柳歌・短歌・俳句・川柳)・小説・随筆・児童文学・紀行・評論などのすべての文芸ジャンルを含む。

多くの方の参加と、関係各位の協力を望む。参加同人の、苦しいが楽しい、コツコツと積み上げる個人的努力と、互いに刺激し成長し続ける「和」の、アクトス活動でありたい。

平成二十一年一月一日

アクトス会長・編集長 大西 亥



目次

娘の結婚	水田竜子	1
俳句	松田政雄	3
「小説」	変身 小野村 新	5
骨人の夏	柴小路秀麿	11
「詩」	大人 大西隆史	21
「俳句」	春の河 夏子	24
400字くらいコーナー		
交信	明花	26
ひとつだけ	令月	28
東京命数取引所	大西隆史	30
傷み	大西亥一郎	31
若き日も今も出会い大切に	小川悦子	32
朝	足達光輝	33
風船売り	はなのはなこ	35
競演 第九回	タイ	
大変なお話	大西亥一郎	39
昭和タイフーン	騒動記 永井組若芽	52
編集室から		56

娘の結婚

水田竜子

最初に生まれた子供は、親にとって思い出深いものがたくさんある。もう22年過ぎた今でも、生まれる時のこと、いえお腹に宿った時のことまで思いだせる。

子供が欲しかったので嬉しかった。帰宅した主人に真つ先に報告した。首がすわった、寝返りができた、お座りした。一歩歩けた時の喜びようといつたらなかった。

そんな娘が4月の半ば近くに嫁いでいった。22歳。あまりにも早い結婚という言葉を突きつけられたとき、とまどった。

学生でお料理もほとんど作ることがない。部屋も女性らしさの漂わない

ような感じだし、頭を抱える思いで幾度となく、まだ先でも、という言葉の口にしてしまった。

その度に嫌な雰囲気になって、「見守ってほしい」と涙を流す娘の顔を見るとこちらまで泣けた。もつと喜んであげればよかつたのかもしれないが、先が見えないばかりの親の心配だった。

今、娘は主婦業をちゃんとこなしている。お料理は肉じゃが、お魚の煮付け、ほうれん草のゴマ和え…などなど。お部屋も可愛らしく飾って、いつも片付いている。

先日主人と娘の家を出たとき、思わずみつめ合つてにつこりした。私たちの娘だったねって。しあわせでいていつまでも。

2004年 毎日新聞女の気持ち欄掲載

俳句

松田政雄

宝あり
幼きころの
故郷は

夏の日に 孫妻つれて 故郷へふるさと

学童は
山川友に
夏過ごす

微笑ほほえみて ふるさとの山 迎えくる

兄姉の 大叔おおおじ父母さん 孫笑顔

今は亡き ふるさとの父母ふぼ 夏に逢
う



あねさく
姉作の いつもの土産 阿波酢橘 すだち

村人の 夏本番は 阿波踊り

同窓会 古希を過ぎても 年一度



「故郷句後記」

昭和36年4月、中学校理科教師として阿閉あえ中学校（昭和37年4月から播磨中）へ赴任してから、半世紀にもなりました。この間、徳島への交通は、最初は神戸港発の客船利用。ついで、自家用車で淡路島を通過するものの島の南北に橋はなく、鳴門と岩屋でフェリー乗り換え。その後、夢の架け橋が島の南北に、それぞれ鳴門海峡大橋、明石

海峡大橋として完成し、大変便利になりました。

変わらないのは、高校生の頃までの心に焼きついている故郷の人情や風景です。この句を詠みながら改めていつも温かく見守り励ましてくれていた故郷に感謝しました。

変身

小野村 新

てインパクトのあるもの変わった。自分の顔にある種の妖艶さを感じた勝子は、鏡の中の顔に微笑みかけてみた。

徳岡勝子は遅い昼食を済ませた後、化粧にとりかかった。化粧水、乳液、ファンデーションをつけた後、鮮やかなレッドの口紅で唇の輪郭を際立たせた。それから、深緑色のアイシャドーを濃く塗った。平凡な顔だちだが、唇と目だけを強調することによつ

黒無地のセーターに茶色のチェック柄のロングスカートを身につける。コートを羽織り、薄いグリーンのサングラスをかける。平生はほとんど化粧をしない勝子にとって、濃い化粧と初めて着たロングスカートは、彼女を落ち着かない気持ちにさせていた。隣近

所の目から逃れるようにして、予約しておいたタクシーに乗り込んだ。

「担任の先生が昨日交通事故で入院したんだよ。横断歩道を渡っている時に、車にはねられたんだ」

帰宅したばかりの洋平が、学生服を脱ぎながら言ったのは、五日前のことだった。

「それで、怪我の方はどうだったの」

「足と肋骨を骨折したらしいよ。一ヶ月ほど入院するらしいんだ」

勝子は、担任教師の心配よりも洋平の高校入試のことが気がかりになった。

「進路の最終決定をしなくちゃならない大切な時期なのに、困ったことねえ」

「十五日の三者面談、学年主任の加納先生がやるらしいよ」

「えっ」

勝子は驚きの声を上げた。こわばった表情を隠しきれないまま、尋ねた。

「どうして学年付きの先生がなさらないの」

「学年付きの先生は、若すぎるんだよ。まだ三年生を担当したことがないらしいんだ」

洋平の入学式の時から数回、加納の話の間く機会があつた。体育館に三百人ほどの保護者が居るから、自分に気づくことはなからうとは思つたが、いつも後部の端の席に座り、うつむいた姿勢で加納の話を聞いた。昨年の進路説明会の時、廊下で、向こうから歩いてくる加納に出くわしたことがある。すれ違いざまに、会釈をした。加納も返した。加納は、勝子には全く気づいた様子もなかつた。

二十五年の歳月は、二人を変えていた。勝子は一昨年の高校の同窓会で、同級生達に驚きの声をあげさせたほど風貌が変化していた。まるまると太っていた高校の頃からは想像もつかないほど痩せていたからである。反対に、加納は太っていた。あの頃の加納は、ひよろひよろと伸びた木が服を着て歩いているような若者だった。今は白髪頭が前から禿げ上がり、あの頃はかけていなかった眼鏡をかけている。神経質そうな素振りも、今でも変わらないが。

勝子は、加納が子どもの通う中学校の教師をしていることを知った時、偶然のいたずらを恨んだ。洋平の持ち帰った学年通信には、加納の顔写真と学年主任としての方針を記した文章が掲載されていたのだ。それ

を、勝子は虫酸が走るような気持ちで読んだ。

加納と面と向かい合うことにはやはり抵抗があった。今さら謝つてなど欲しくない。かといって、加納を責める気もない。加納とのことは、勝子の内でさっば

りと清算されていたのだ。それだからこそ、よけいに加納と会わずに済ませたかった。勝子がこの地に住んだことを加納は偶然と取らないかもしれない。そう考えると、いやが応でも加納には会いたくなかった。夫の国



男に、今回は進路決定の大切な懇談会なのだから出席してくれるよう頼んだが、駄目だった。子どもの懇談会のために会社を休んでくれるような夫ではなかった。

加納とは大学二年生の夏に知り合った。加納は、勝子が足を痛めて退部したバレーボール部の次に入った、映画研究会の先輩であった。神経質そうな目をした華奢な体格の男だった。南への憧れから鹿児島の大卒までやつて来たという、加納の言葉に勝子は惹かれた。加納の下宿にはたくさんの洋画のビデオが揃っていた。それを二人で観ることが楽しくてしやうがなかった。ロマンチックな映画の後の抱擁は、勝子を異国のヒロインの気分にした、秋風が吹き始める頃から、勝子は毎日のように加納の下宿を訪

れるようになった。そして、翌年の十月、勝子の叔父のコネで鹿児島市役所に加納の就職が内定した。勝子は、公務員の妻として生まれ故郷のこの地で、平凡な人生を過ごすのだろうと考えていた。(俺は鹿児島から離れられなくなつてしまつたよ。一生この地で君と暮らすよ)。加納が囁いた甘い言葉を、勝子は信じた。

それにもかかわらず、加納は翌年の二月初旬、勝子に何も告げず鹿児島を去つた。卒業式にも出席せずに行つてしまつたのだから、何か深い訳があつたのだろう。しかし、東京から届いた加納の手紙にはその辺の事情は全く記されてはいなかつた。結婚できなくなつたことと、叔父に就職の内定を取り消してくれるよう頼んでおいてく

れという用件だけの、極めて簡略な内容のものだった。

すでに洋平は校門の前で勝子を待っていた。勝子を一目見て驚きの表情を隠さなかつた。

「何だい、お母さん。ずいぶん派手な格好じゃないか。近づいて来るまで誰か分からなかつたよ。面談の時は、その眼鏡外してくれよな。」

「いいじゃないの。薄い色なんだから。これくらいなら先生にも失礼にならないわよ」

ひと組の親子と交替して教室に入った。あれほど高鳴っていた動悸が教室に入るやおさまった。なるようになれといった覚悟が、勝子に落ち着きを与えたのだ。

挨拶を交わし、子どもと並んで腰を下ろ

す。机を隔てて、一メートルほど前に加納の顔がある。資料を見ながら、「だいじょうぶだと思えますよ、K高校」と、結論を先に言った。

黒い太縁の眼鏡の奥で、神経質そうな目が光った。二十五年前の面影は、この目にか残っていない。禿げ上がり、醜く太った初恋の男は、縁もゆかりもないただの中年男と化していた。どうしてこんな男に夢中になつたんだろう、という思いが心をよぎつた。二十分間の間、加納はほとんど洋平と話した。最後に、ひとつ勝子は質問をした。

「私立高校を受けておかなくてもだいじょうぶでしょうか」

その時、加納の目が勝子を見据えた。わずかな沈黙があつた。加納のかすかな表情

の変化を勝子は見逃さなかった。

「K高校なら、よほどのことがない限り合格は間違いないと思います。M高校を受けるのであれば、私立を受験しておいた方がいいと思いますよ」

腕時計に目をやった加納は、洋平に入試までの三ヶ月しっかりと勉強するよう励ました。

「ありがとうございます」

洋平が満足そうな声で答え、立ち上がった。その声が続いて、勝子も頭を下げた。教室を出て行く自分の後ろ姿を、加納の視線が捉えているのを感じた。その視線を払いけるように、勝子は足を速めた。



骨人の夏

柴小路秀磨

九月の京都はまだ盛夏である。昔は夏休みが終わるともう秋で、運動会などは正に秋の行事であった。今や、九月下旬に行われる中学校の体育大会などは猛暑の行事と化した感じがする。生徒達にも増して、行事に取り組まれている先生方のご苦勞を察する。

それにしても、日本の四季の中で夏の占める時期が年々長くなつていくように思われる。かような日本で最近では、栄養状態よろしく誠にふくよかなる体型の方が増えつつあるようだが、太つた方はどう見ても夏向きとは言えない。じつとしていても汗をだらだらと流している様は誠に気の毒な位である。おまけに歩けば股ずれというものを起こすらしい。私のようにやせた骨人は股の間は五・六cm位はあいている。そんなか細い足で焼けた地表を陽炎の如くフラフラとさ迷っているわけで、一度でいいから、どつかと大地を踏みしめてその股ずれという感触を味わつてみたいものだと思う。

そもそも「脂肪」というものは、神様が我々人間に冬の寒さに耐えうるように与えて下さつたものである。さすれば、寒さに耐え難い私のような骨人は正に夏向きであると言えるか知れぬ。確かに太つた人から見れば骨人はいとも涼しげで夏を快適に過ごしているように思われ勝ちだが、私の場合はそうではない。

高温多湿の日本の夏、油照りの下では骨人も太った人程ではないにしても少なからず汗をかく、その汗が問題である。

私は骨人にしては珍しく大へんなあぶらしよう脂性で、鼻の脂は言うまでもなく、顔面の皮膚は年中脂が浮いており、常時あぶら取り紙を手離さないでいる。煙草を吸う時などはライターの火が引火しないかと気を使う程である。そこに夏の湿気からくる汗が混じると脂汗となつて皮膚の表面は重油を塗られた如くべつとりとして、終日乾燥しない傾向がある。従つて乾燥肌の人が、蒸し暑い夏に日焼け止めのオイルをわざわざ肌に塗るといふ行為は考えも及ばない。私にとつては不快極まりない行為である。それにしても、私の顔面の自家製オイルを何とかエゴ活用できぬものかと日々悩んでいる。ともあれ、顔面はもちろんのこと、夏は衣服と皮膚との間に一つの脂汗という汚水の層を持つことは誠に不愉快この上ない状態である。しかも私の汗は乾いたタオルで拭い去ることも、水で洗い流すことも出来ない脂汗である。太った人が滝のように流れる汗をタオルで拭つている光景を私はうらやましくさえ思う。皮膚を覆つた脂汗の感觸ほど情けなく憂鬱なものはない。ただ、その汗を温水と石鹼で洗い流す快感はこの上もなく良い。悪性の脂汗で覆われた体を夕方の一風呂で洗い清める幸福は、いい加減な恋愛よりは高雅な価値があると思う。

さて、脂汗の不快感は風呂やシャワーで何とか解消できるし、命に係わる問題でもないの

で、私は一応耐えてはいるが、私にとつてもつと深刻な問題がある。それは夏場における食欲の減退である。

我々骨人は大体が生まれつきの胃弱が多い。私も例外でなく、育ち盛りの頃は別として、若い頃から「食欲」というものが一週間安定して続くということがまず無い。週の半分は胸焼けや胃もたれに悩まされている。まして、高温多湿の夏ともなれば、胃の衰弱は著しく、食欲不振は一層深刻なものとなる。

私の胃は医学的に言うところ「萎縮性慢性胃炎」というやつで、胃の筋肉が無力になつていつも居眠りをしていゝようなもので、一種のサボタージユと見ていい。胃がサボタージユを起こしているのだから、第一に食欲が起こつて来ないのだ。朝、義務的に口に入れたものが昼になつても晩になつても停滞しているのだから堪らない。腹がなかなか減つてくれないのだ。ならば何も食はずに済ませれば、私のような年金暮しにとつてはすこぶる経済的でいいわけだが、同じ欲でも「性欲」ならば、この年にもなれば無ければ無いで済ませておさしてつらくもないが、こゝ「食欲」となればそれも行かない。

「食欲がわかない」ということが人間にとつてどれほどつらいことか、夏場でも食欲旺盛な胃丈夫（胃の丈夫な人）にはどうてい理解できない。食欲がないのにただ生命維持のため義務的に食べ物を口にする。ことの何と虚しいことよ。「おいしい！」という感動が全く得られず、

食べ物のもつ「味」というものがわからないのである。「おいしい」という感覚なしに「味の無い」ものを無理やり胃袋に詰め込むことはもう拷問に等しい。

「空腹は最高の御馳走」とはよく言ったものだ。私の如き胃弱亭骨人でもたまには朝から珍しく食欲がわき、空腹をがまん出来ないという日もある。そんな時にたまらず口にした物の何と「おいしい」ことよ。「これが本当の味なんだ！」と思わず叫びたくなる。その一方で、私にとつては久しぶりの奇跡のような食欲を何で満たしてやろうと、つい欲望にかられ、ガイドブックに頼って入った店が、期待に反し、せつかくの「食欲」をつまらぬ物で満たしてしまつた時の悔しさは計り知れず、その時の虚脱感は一曰続く。ガイドブックも所詮店の宣伝に過ぎぬこと、しかも多くは若い人を対象にしているということをおくべきである。

多くの人間にとつて「食欲を満たす」ということがどれほどの楽しみであり、生きがいとなつているかは、巷にあふれるグルメガイドの山やテレビの旅番組を見てもよくわかる。旅人が各地の名所旧跡を訪れるといった番組も、その内容のほとんどは各地の名物グルメを味わうということに時間をさいている。楽しい旅も「食」抜きでは語れないのである。夏バテで食欲の減退した私は、テレビを見ながら、「旅ガール」が名物を口にして感嘆の声を大仰にあげているのを見ると無性に腹が立つのである。

もはや夏の京都でかろうじて私の味覚を支えてくれるものは「漬物」に「ぶぶ漬け」ぐらい

に成り果ててしまった私の側で、「やっぱり夏バテには鰻が一番やなあ。」などとというセリフを聞くと実に腹立たしい。そんなことを口にする御人に限って私に必ずこうおつしやる。「もつと食べなあかんで、食べへんからやせるんや。」と。「食べべられないからやせるんや」と、言い返したくなるものだ。食べさえすれば肥えるという発想は健康な胃袋を持ち合わせた人にあてはまること、およそ人間というものは強者ほど弱者の気持ちを理解し難いものであるらしい。

一昔前、「大泉 晃」という軽妙な骨人俳優がいたのをご存知だろうか、(今活躍中の大泉 洋ようの父)。彼が出演していたおもしろいCMがあつたので紹介する。

ポリポリとお菓子をほおばりながら片肘うでぢやついてテレビを見ている太った妻に向かつて、側にいるやせた夫がいつも羨うらやましげにつぶらな瞳に憂いをこめてこうつぶやくのだ。「母さんは胃が丈夫でいいね!」と。この吐き捨てるようにつぶやいた一言は、実に胃弱亭骨人の嘆きを的確に言い表しており、思わず苦笑してしまうのである。恐らくどこかの胃薬の宣伝であつたと思ふ。

書店には「やせるための○○○○」とか、「一ヶ月で○○kgやせられる」といったようなタイトルの本が沢山並んでいるが、今だ、「太る方法」を記した本に出会った事がない。胃丈夫



にとつては太ることはいとも簡単、ちよつと油断して「食欲」を満しさえすればよいのだろう。故に、太った人は努力次第ではやせる方法は幾つかあるだろうが、私のような骨人にとつて太る方法は唯一つ、外科的手術によつて丈夫な胃袋と取り替えるしかないのではあるまいか。結局、胃弱亭骨人は弱い胃袋を持ち合わせたという不幸を恨むしかないのだろう。

いずれにせよ、私から見ればこの猛暑の中でさえ、食欲旺盛で常に空腹感を持てる人は誠に幸せな人である。毎日の食事をおいしくいただけける幸せに勝るものはない。

敬老の日も近づくと、よくテレビに元気なお年寄りが登場するが、そのお年寄りに対し、必ずと言つてよい程だされるのが、「長生きの秘訣は何ですか？」という実にくだらぬ質問である。そんな答えは本人だつてわからない。「毎日〇〇を食べている」とか「毎日〇〇をしていゝ」といつたことは、結果論に過ぎない。人の寿命は本人にもわからないものなのだ。もし私なら、「食欲をなくさないことです」と、自信をもつて答えるだろう。九十歳以上のお年寄りは、皆口をそろえて言う、「なにをたべてもおいしい！」と。

人間にとつて全ての食欲の根源は「食欲」である。「食欲があれば何でも出来る」とよく言うが、食欲がなければ食欲はわかenないはずだ。実際、胃の調子が良いと何事にも前向きで、一日が楽しく充実している、全てにおいて意欲的になれる。政治家とスポーツマンには絶対に胃弱の人はいないと断言できる。

今年の京都も連日厳しい暑さが続き、私の食欲は減退するばかり、食欲低下は体重減となつて体重計の数値にはつきりと示される。この時期になると私は体重計に乗るのが恐ろしい。私の通うスポーツジムでは多くの人が体重計に乗るたびに、「ああ、又肥えた」とつぶやくのをよく耳にするが、私からすれば「丈夫な胃をお持ちでけっこうですね」と皮肉の一つも言いたくなる。私ときたらいつも体重計に乗る前にたらふく水を飲んで、祈る思いで体重計に乗るのだが……。



ある日、私はいつものように体重計に乗り、その数値に頭がクラツとした。何と46kgという数字が目には焼きついた。私は何度も体重計の上で踏んばってみたが、数値は変わらない、去年までは夏やせしたといつても48kgを割ることはなかつたのに……。身長一七〇cmに近い体で、この体重は尋常ではない。そして私の妄想は始まる。食欲不振↓体重減↓癌↓死という図式を描いてしまう。人間も動物も皆食べられなくなつて死ぬ。去年の秋、愛猫の「キキ」もガリガリにやせて死んでしまった。毎日このことが頭を離れなくなる。すると、単なる筋肉痛や、ささいな体調異変まで全て癌と結びつき、私の妄想は増々深みにはまり、食欲もさらに減退するという悪循環に陥つてしまう。「俺はもう胃癌だ。」と思ひ込んだあげく、結局は決死の覚悟で胃カメラを飲むということになるわけである。そして医者から胃炎の薬をいた

だいてやつと平静を取り戻すというのが私の年中行事となっている。

胃の調子が悪いと家でも愚痴つぽくなるもので、妻の前でつい弱音を吐いてしまう。そんな私に、妻は「癌の人間が走れるもんか、暑い盛りに走ったりするからバテてるだけや、私の胃薬でも飲んで。」と、いともつれない返事、そうなると思議なもので「癌」とまではいかなくとも、医師からもつともらしい病名を告げてもらい、妻の同情をひきたくなるものだ。

総じて病人というものは、病気を死なぬ程度において十分重く見てほしがるものらしい。「なんだ、それくらいのことだ。」などと言われると病人の機嫌はよろしくない。「なかなか大変だね」などと賞賛されると随分喜ぶものだ。しかし、決して「死ぬ」と言っではいけない。すこぶる気ままなものである。私も自分の胃病を軽蔑されると妙にしゃくにさわる、「俺はそんなくだらぬ胃病とは違んだ。」と威張つてみたくなる。実にくだらぬことである。

ともかく夏の間というものは、私は厄介な胃の腑のため、随分と人知れず余分な苦勞をしているわけで、私のような骨人でさえ暑い間は冬の寒さが恋しく思われてならないのである。

この三年京都に住んで、日本人（京都人）にとつては、冬の寒さよりも、夏の暑さに耐え難さを感じていたのであろうとつくづく思う。京都に残る寺院や町屋の建築構造は言うまでもなく、「打ち水」「簾」「風鈴」等々、夏の暑さをしのぐ工夫は沢山見られるが、冬の寒さに対する工夫はそれほど見られない。貴族や武士の好む寢殿造や書院造などはどう見ても

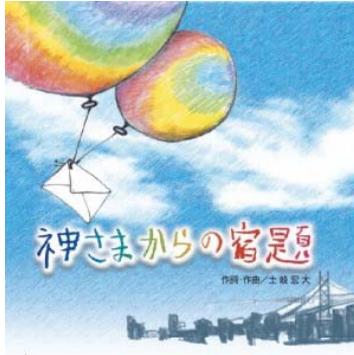
冬に適した住居とは言い難い。あの兼好法師でさえ、徒然草の中で、「家のつくりはやうは、夏をむねとすべし」(第五十五段)と、おつしやつている。古来より、日本の夏は耐え難いものであったのだ。生理的にも、人間は暑さに耐え難く、熱さの方により苦痛を感じるものだ。高温サウナに閉じ込められて、氷をつかむ方がまだましだと思いませんか。

それにしても、年々、夏季が長くなるようだ、今年も五月の末に始まったむし暑さは、九月の下旬になつても続いている。やがては京都も夏と冬の二季になつてしまうのではないかと私は心配している。そうなれば、冬の間は私のような骨人でも何とか栄養を保持し、生き抜くことも出来ようか、夏の間はどうしようもなく、やせ細った体で、エアコンの利いた部屋に蟄居するか、信州辺りへでも転居するしかないであろう。

もうそろそろ秋も彼岸だと言うのに暑さは一向におさまらない。私の胃袋も相変わらずサボタージユを続けており、体重も48kgを割ったままである。何とか一日でも早く秋の冷気が私の胃袋に活を入れてくれないものかと祈る思いで筆を執っている。胃が弱つているともネガティブになるものらしい。とりとめもない愚痴とまとまりのない自虐的な文章をだらだらと書いてしまったことに恥ずかしさを覚えている。

ああ、耐え難し、骨人の夏……。

筋肉が骨になる難病（FOP）



◆筋肉の細胞が骨に変わる「進行性骨化性線維異形成症（FOP）」という難病があります。

明石でも魚住中2年の山本育海君がFOPです。

◆2008年2月、育海君を支援する団体「FOP明石」が発足し。ブログで育海君や病気の情報を発信し、治療法開発につながりそうな活動を続けています。この活動などで、07年にFOPは難病に指定されました。

「神様からの宿題」は育海くんの書いたお話が絵本になったもの。またイメージCDやライブ活動、更には絵本の英訳や、iphone アプリ化も進行中です。

◆治療薬の研究費にあてる募金も行っています。ぜひ、ご協力下さい。

◆問い合わせはFOP明石事務局

(080・3775・2257)

◆絵本やCDの販売も行われています。詳しくは下記HPでご確認下さい。

◆ <http://www.fop-akashi.jp/>

大人

大人になるっていつたい何なんだろうか
怒りをコントロールできるようになって
泣きたいのも我慢できるようになって
私は、大人になっただって言われた

でも、

最近は何もを忘れた気がする
最近は何もを忘れた気がする
怒る時なのに
泣く時なのに

怒りも 涙も 顔を見せなくなつた

吐き出されなかつた怒りはどこへ行くのだろうか

怒りが体中を駆け巡り

細胞の一つ一つを傷つけていくのか

時々細胞がみしりと音を立て

助けてくれと叫びだす

流せなかつた涙はどこへ行くのだろうか

体の奥底にぼつりぼつりと流れ込み

澱となつてしまうのか

時々澱がぼこりと泡立ち

叫びだしたくなつてしまう



大人ってなんだろう
そんなことを考えられる内はまだ子供でいられると
にじりよる不安から目をそむけ
私は今日も眠るのだ



俳句

夏子の恋シリーズ第VII
10号 秋入日……恋の残り火のつづき

春の河……君の幸せ

夏子

花吹雪 振り返らないと決めたのに

私の影今日も揺れてる春の河

花明り 君の幸せ信じてる

行き先は流れのままに花筏

花の雨 歩き始めた石ころ道

勿忘草 いつか何処かでまた会える

完



◆報告

前号、11号に、『いなみペンの会』の吉田瑞代さまから「撫子だより」の一文を頂戴しました。この度、吉田瑞代様から

アクトスへのお志をお送りいただいたので紹介しておきます。

◆400字くらいコーナー

◆明花さんから提案頂いたコーナーです。最初は「いくら短くてもいいから600字くらいまで」と考えていたのですが、最長は1200字くらいまでとしました。随筆などで、最初の勢いで書けるのが原稿用紙2、3枚のことが多いようです。携帯小説のようにコント、会話文だけといったものなら極めて短いものも可能です。また、編集手帖のように、例えば今の政治状況を踏まえて何か書くなら背景が読み手にわかっていきますので比較的短いものでも済むようです。また、星新一・阿刀田高・新井素子・小松左京・川端康成といった作家のショートショート・掌編小説ならば、少し長くなります。アクトスでは10枚、20枚くらいのものは従来どおりですので、3枚くらいまでをこのコーナーの対象にしますが、コーナー対象であることを明記してお送り下さい。俳句や短歌・川柳・詩などはコーナーに入れません。判断についてはこちらにお任せ下さい。

交信

明花

「運転、うまくなったな」

「えっ、お父ちゃん？」

どこからともなく、一匹のトンボが私の車を追うように飛んでくる。運転席の窓側に並んだ。自動車に追いつくように飛ぶのは大変なのではないのだろうか？ でも羽は空気の抵抗を感じさせず「ツイー」つと、楽しむかのように並んでくる。トンボの目玉が少し左に動いたようだ。視線を投げかけてくる。含み笑いまでしているように「ちらつ」と目があった。

私が運転免許をとるのに四苦八苦していたころ「大丈夫、誰だつて歩いてるように運転できるようになる」と励ましてくれたのは父だった。生前、何度か乗せたことがあるはずなのに。心配していたのか。

ほんの二、三分並走すると、ぶいと飽きたようにトンボは右羽を少し下げ、見事に旋回していった。まるで航空ショーで編隊を組んでいた飛行機が一機ずつ離れていくようにスムーズな動きで。

「安全運転でな」

「うん、分かった」

あれは父に違いない。それにしても赤トンボとは。赤とんぼの愛称を持つ「ゼロ戦」が好きだったと言え。

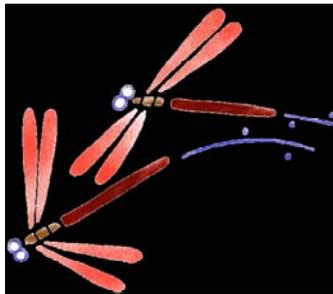
父は空を飛ぶものが好きだった。

二〇〇六年、オペラ歌手秋川さんが歌いヒットした『千の風になつて』の歌詞のようにお墓の中で眠っていないと思う。

父は風ではなく、今日はトンボに変身したようだ。

「お父ちゃん、また寄つてな」

残暑の厳しい9月中旬。夕暮れ時の国道2号。そろそろライトを付けよう。安全運転のために。



ひとつだけ

令月

学生になって半年：通学電車の中から外を見るのが日課になった。私が乗っているのは廃線が囁かれている田舎路線。

けれど田舎路線にもいいところはある。それは景色の良さだ。TVの紀行番組のように綺麗な田園風景とまではいかないが、桜、藤、育ちゆく稲、彼岸花にコスモス：電車の中から外を眺めるだけでちよつとした旅行気分になれる。そんな風に旅行気分を味わいながら電車に乗っていると、コスモスの群生が見えて、ふと小学校の時に読んだ話の中の一文を思い出した。

「ひとつだけちよつだい」

戦時中の話だった。小さい女の子が何かを欲しがるときに「ひとつだけちよつだい」と言っている。女の子にとつてその言葉は魔法だった。そう言えば何でももらえたから……。ある日、

女の子の父親が出征することになり、お母さんは貴重なお米でおにぎりを作った。けれど女の子はお腹が空いてしまい、いつものように魔法の言葉を言う。

「ひとつだけちょうだい」

出征する父親は女の子におにぎりを全てあげるが、それでも女の子は魔法の言葉を繰り返す。けれどもう手元におにぎりはなく、女の子は泣きだしてしまふ。それを見た父親がコスモスの花を一輪、女の子にあげた。「ひとつだけあげよう。ひとつだけのお花、大事にするんだよ」そう言つて、父親は出征して行つた。

そんな話だつたような気がする。何せ十年以上前に読んだ話なので記憶があやふやだ。それでも、コスモスを見た瞬間に「ひとつだけちょうだい」という言葉が鮮明に思い出された。

「ひとつだけ」今とは違うその言葉がもつ重みが、実感もなく、想像も

出来ない当時の戦争の悲惨さを伝えてくる。平和ボケして、ありがたみを忘れつつある日常の中、電車に揺られながら「ひとつだけちょうだい」と誰に聞かれることもなく呟いてみた。



東京命数取引所

大西隆史

ようこそ、東京命数取引所へ。こちらは初めてで？ええ、なら簡単にご説明しましょう。あちらに、表記されている数字が人々の命数とその価格でございます。そうです、寿命ですね。その横の数字は、その命のお値段でございます。命の値段が平等だなんてことはございませんからね。その方の価値を評価させて頂いて、お値段をつけさせていただいております。もちろん、こちらに上場される方でしたら、ご自身の命数や金銭で取引可能でございます。えつ、こちらの方ですか。少々お待ちを……入会されておりますね。お客様はどうされますか？そうですね、どうもありがとうございます。では、こちらにご記入を。

はい。あ、これはお世話になっております。えつ？命数が急激に減っておられるつて？……おや、これは大口の買いが入っておりますね。やめたい？違約金は残りの寿命の70%ですよ。もしもし？……おや、切れてしまったようだ。人を呪わば穴二つか。

傷み

「古くなったなあ」

ろくに着ていない背広も数年経つと、なんとなく古びてくる。建物もそうだが、住んでいるマンションは31年で2回、改修した。2年前の改修では屋根・廊下・階段を張り替え、ドアを取り替え、手すりもエレベーターも交換、壁の塗料もぬりかえたから新品同様な顔つきをしている。但し中身は古い。

（古家に古女房か…）

ふっと笑ったら、妻がぼつりと言った。

「あら、あなた、頭の後ろが…、うすく…」

「それは、塗料がはげているんだ」



大西亥一郎

若き日も今も出会い大切に

小川悦子

ラジオから高校生の頃に好きだった歌手の歌が流れてきた。耳を澄ませていると、青春真っ只中のあの頃が目の前に浮かんできた。

友達といっぱい語り合った日。クラブ活動に明け暮れたあの頃。小さな恋もした。甘ずっぱい思い出が懐かしい。もう二度と巡ってこないけれど、心の中にはちやんとしまつてある。

時折、遠くにいる故郷の友と連絡をとる。話をしていくとすぐに、学生時代にタイムスリップしてしまう。お互いに年は重ねても受話器から聞こえてくる声はあのころのまま。「またクラス会しようよ」。電話を切る時は、どちらからともなくこう言う。

そして今、子供も独立し、第二の青春を生きている私。自分の好きなことを思い切り楽しめている。そんななかで出会う人とのつながりも大切にしている。今、このときもいい。



朝

足達光輝

八十四歳にもなると、眠りが浅い。

たまたま前の日の過ごし方で、「よく寝た」と思うことがあるが、その朝がそうだった。

初秋の朝日が縁側のガラス障子から差し込んで、ゆるゆるとぼくの顔に当たり始めていた。

空気は澄んで冷明、鼻腔に心地よかった。庭の金木犀の香りが部屋を満たし、隣の妻の密やかな寝息がぼくをドキリとさせた。

三つ違いだ、五十年も連れ添っている。夫婦二人だけになってからでも二十年以上になる。その妻にいとおしさを感じるとは、恋愛時代以来のことかも知れなかった。

そつと体を起こして布団から抜け出すと、廊下に出て洗面所に向かった。

水を細く出して、手に受ける。

水道水なのに、薄青く見える透明さと、鮮烈な感触があり、かすかに香のにおいがした。何かはわからないが、胸が透明にすき通る感じがした。口に含むと、甘い香りが広がった。

クローゼットでパジャマを脱ぎ、白いワイシャツに手を伸ばした。久し振りである。特に予定

があるわけではないが、ふとそう思ったのだ。一番気に入っている黒と焦げ茶模様のネクタイを締めて、クリーニング済みのお気に入りのダークグレイの背広を着た。ハンケチとテッシュを用意してから、ポケットチーフを引き出しの奥から引つ張り出した。少し考えて、元に戻す。実はあまりしたことがない。

玄関の靴箱から一番高級な靴を取り出したが、「歩くのには適してないな」と考えて、いつもの黒のウォーキングシューズに変えた。これでも背広には十分に似合う。

外にいる人の気配を無視して、和室に戻る。

妻の顔を見た。

人は所詮独りだが、共に歩む仲間がいる。ぼくの場合は妻が一番の仲間で、幸いに肉親や友達も多かった。

「きれいだよ」と呟いた。

八十一歳になる妻は輝いて見えた。

妻の額にそつと近づいて口づけした。かすかに妻が微笑んだ気がした。

それから、ゆつくりと眠っているぼくを見た。もう目覚めることのないぼくが布団の中で静

かに目を閉じていた。

ぼくは再び廊下に出て、玄関に向かうと、ドアを開けた。

彼の人がにつこりと頷いた。足下の雲の上に、ぼくはそつと踏み出した。

了



風船売り

風船売りは駅前の広場に店を広げます。

赤・青・黄・緑・白・ピンク、色とりどりの風船。中にはパンダやクマなど動物の顔の形のものや、花の形をしたものもありました。

「あ、お母さんの好きな向日葵の風船だ」

おばあさんに手をひかれた女の子が立ち止まりました。

「この花といつしよに、病院に持っていつてあげたら元気になるかしら」

はなのはなこ

「お母さん病気なのかい？」

女の子は悲しそうな目をしてこくと頷きました。風船売りは、上のほうから向日葵の風船をとつてやりました。

「これで、きつとよくなるよ」

「もらつていいの、おじさんありがとう」

女の子の顔が向日葵の花のようにぱあつと明るくなりました。

飛んでいく風船 幾つもの夢のせて



書きやすく書きにくい400字くらいコーナー

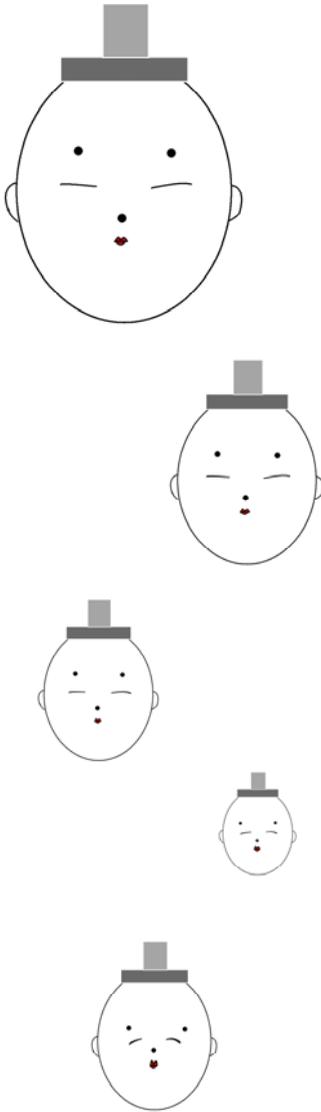
このコーナーは、一息に書けるという点で、『書きやすい』コーナーです。ただ、それを読み手に理解してもらおうという点では難しいコーナーです。『短編の名手』といういい方がありますが、長編の名手が短編も上手

いということではなく、逆もまたありません。もつとも両方書ける人もたくさんおられます。

今回は初めてですが、「うむ、なかなか良いものが集まったじゃないか」と思っています。

『心に響く』作品集になりました。

ドンドン書いて下さい。いつも意識しておけば、チヨットしたきつかけで物語が生まれます。嬉しい・哀しい・面白い・切ない・驚いた、という心を動かす、心に響く**ドラマ**を書いて下さい。形は小説でも随筆でもかまいません。勿論詩のようなものでも結構です。



なにしている？

大西 亥一郎

あなた この頃独り なにしてる
色々うろうろしています
時間の中で さまよいながら
溶けていくのを待つてます
あがきあがいて さまよつて
なにものごさず
刻の一部に なりまする



◆近隣地域で、浄土宗のお寺を、お探しの方のお役に立ちたいと思います。

浄土宗 永金山 常纂寺

〒651-2133 神戸市西区枝吉4-40

■ TEL : 078-928-6622

■ FAX : 078-928-6858

◆メール hayato13@yc4.so-net.ne.jp

住職 佐藤 俊明

副住職 佐藤 明宏

競演 第九回 タイ

大変なお話―アクトス始末記―

大西亥一郎

8月13日の例会は暑かった。

連日33度くらいの猛暑の上に、兵庫県明石市は神戸・姫路などに比べても雨が少ない。にわか雨さえなくて、『茹だつた』。

もともと瀬戸内式気候は、中国・四国山地に挟まれて雨が少ない。そのためか農用水の溜池の多さは他に例を見ない。

明石は背後に山がなく、神戸・姫路に比して年間降水量も200ミリ程少ない。

早朝5時半頃、畑に行く、知り合いの方が「サツマイモの水やりを忘れてひと畝枯らした」と言われていた。サツマイモは原則天水のみで良い。連作も5年くらい可能で飢饉の時の食べ物でもある。俺は「ナルトキントキ」という種類をひと畝だけが、流石に今回は水を時折与えている。

2時間前後の農作業から帰って、シャワー・朝食のあとは大の字になる。小一時間寝てしまう。外気と日光に触れて仕事をするというのは、6年目で慣れたとはいえ体にこたえるらしい。

午後2時20分、途中でペットボトルのお茶とシ

ユークリームを買って、自転車で衣川コミセンに着く。一番暑い時間だ。下り坂で風を切って涼しいはずなのに、早くも背中に汗がにじんでいる。

駐車場に車が1台しかない。

自転車置き場も閑散としている。

お盆真っ最中だ。

「暑いですねえ」

と受付で声をかける。

知り合いの大柄な所長さんが、笑顔で振り向いて、少し首をひねりながら言う。

「あれ？ 今日のアクトスは中止じゃないですか？」

ぞつと寒気がして、どつと汗が噴き出す。

「は……」

声が凍りついて、ポキリと折れた。

俺の心も体も一瞬硬直している。

例会中止？ だって、なんのこつちやい、えらいこつちやい、と、京都から来るかも知れないSさんの顔

が浮かぶ。小野市からのS.iさんも来られるかも知れない。

3人集まれば、今までも例会をしていたので、なんとなくなるが、2人で顔つきあわせてというのはちょっと苦しい。

大体、例会が中止ならば、HPの掲示板はもちろんだが、通信を出すか、メールや電話で連絡しておかねばならないが、もちろん後の祭りである。

女性職員が受け付けノートを見せて下さる。

なるほど、「中止」という文字が、俺をあざ笑うように躍っている。

（俺もいよいよ、両親の如く認知症か……。中止にした覚えはないのだが……）

心が萎えてくる。

「ま、とにかく事務室へ」

所長さんのお言葉に救われて、ソファに座る。冷たい麦茶が目の前に出る。

盆の間はコミセンも暇で、殆ど集会がないらしい。

「私も、こんなミスなんて、惚けましたわ」

といつつ、いくら考えてもわからない。中止を届け出た記憶を探るが影もない。

（暑いからやめよか、とでもいうたんやろか……。覚えがないと言うことはやはり、いよいよ俺も……）

とますます思わぬでもない。

笑われるかも知れないが血液型はA型で神経質・小心、そして「ええい」と飛び降りる破滅型の性格だ。細かいことが気になり、確認を繰り返す性で、いままでこういうことでミスをしたことはない。

（そういえば、神経質だから、人生64年間で、電車を乗り過ごしたことも、財布を落としたことも一度もないなあ……）

自分で自分に些か嘲りの混ざった感心をする。

妻と見合いした。

まん丸顔で黒縁眼鏡に、七三の頭の中学教師。

（こんなくそまじめそうな人）

と妻は、親戚のおばさんにまで相談したらしい。

「まじめな人が一番よ」とおばさんに言われて結婚を決めたという。

だが、誰も言わないが、親父ギャグの天才で、『食べたスイカのタネがお腹から伸びてきて』なんて、訳のわからない物語を書く人だとは思わなかったらしい。

それは兎も角、神経質とまじめ、きつちりしているのも取り柄だ。それが、例会取り消しを忘れているとなると冗談ではない。

「誰か来るかも知れへんで」所長さんが慰めて下さる。「もし、誰か来たら改めて部屋の借用申込書の届けだしてもろたらええから」

あ、哀れな話だ。

（しかし、まあ、開始の3時過ぎまで待つてみるか：
ん）

麦茶に手を伸ばしかけたら、受付に帽子を被った女性が来た。

ちらりと見上げて、関係ないわ、と思いかけて、はつとした。会員のOさんだ。いつもと雰囲気が違っていたので勘違いしたのだ。

2時35分である。

「よかつたやん、ほんなら会議室を」

所長さんが鍵を片手に出て行く。

俺は慌てて、ソファに戻り、露の付きだしたコップからお茶を飲み干す。

お礼を言い、Oさんと会議室に入る。机を移動し、椅子を並べ、カーテンを引いて、エアコンを入れる。

コップとペットボトルを出し、買ってきたシユーク

リームを出す。

「中止になっていてねえ：」

Oさんに言うが、彼女は、中止とは聞いていないという。

「まあ、もうチョット待つて」

腕時計を見る。あと15分あるが、どうも誰も来そうにない。昨年、8月の14日（土）は、俺とTさん、Uさんの3人だ。

元々、8月の盆というのは無理なのだろう。

因みに、昨年は、俺が勤務していた大学のオープンキャンパスが土曜にあり、秋に3回欠席しているが、その3回とも出席者は3人である。

多い時は7人くらいにもなるが、やや固定化しつつある。

（知り合いが義理で入ってくれているしなあ：）

と考えが進む。俺を除く14人中、俺の先輩友人・親戚が、9人である。Tさんはマスコミを見て、Siさんは友人の友人、Oeさんは俺の講演会を

聞いて、Uさんは知人、TとSさんはこのコミセンの職員時代に知り合つてという関係だ。

過去に、マスコミで知つて入られたKさんと、T Sさんはそれぞれ、退会・自然退会。設立時からのHさんは自然退会と出入りも結構あつた。

(マンネリかもしれないなあ……)

漠然と思う。組織は動かないと錆び付いてくる。

作品を発表できる冊子があることは、素晴らし
いことに違いない。

実際、モノクロ印刷雑誌は、業者に頼むと発行
するのに薄いものでも数万円はかかる。

短歌や俳句などを集めるのなら、薄い冊子が2
万円程度でも印刷できる。が、散文となるとそうは
いかない。

アクトスと同型の70ページ程の冊子は10万
近くなる。もちろん、ただ文字を印刷するだけで。

複雑なレイアウトや、文字の大きさを変えたり、段

組したり、野線を入れたり、カラーなどは望むべく
もない。

冊子の配布も同人はもとより、俺が動ける範囲
では出来るだけ配っている。もちろん「見てもらえ
ている」が「読んでもらえている」かどうかはわから
ない。

内容をどうしていくかは大きな課題である。

例会はどうだろうか。

(魅力がないなあ……)

と思う。

俺が経験してきた同人集団、「プレアデス」「森
はなを囲む会」などでは、例会の回数は少ないが、
必ず2次会があり、喧々ガクガクの梁山泊的な会
合があつたが、アクトスはきれいに流れすぎている
上に、踏み込んだ批評を避けてきた節がある。

それは組織の要の俺が情性に流れていたからだ。

『好きでやっている』『俺のボランティアだ』という意識が、『倦怠感』となり、新しいアイディアの実行や、組織の牽引車としての動きを鈍くしていたのだ。



組織ではない。

頭の隅でモゴモゴうごめく思いを、かみしめながら雑談が始めるが、3時前、誰も現れない。
(2人ではなあ…)

中止にしようかと思っていると、3時ピッタリにT

さんが現れる。
「中止なんて聞いていないですよ」
入会以来、無欠席で、この春からは会計などで随分お世話になってるTさんが知らないということとは、あのノートの中止は何なのだろうか、何かの間違いなのだろうか、謎は深まるだけだ。

ほつとして、まあ今までも、3人というのは8回ばかりあつたし、昨年8、11月は連続4回3人だつたので、これで始めることにする。

Tさんが「明石市文芸祭」に応募される話と、応募原稿の字数制限、原稿を削るという話で盛り上がる。

いよいよTさんも武者修行を始めるらしい。
(アクトスは垂れ流し…、であつたからなあ)
と苦い思いがわき上がる。

俺は出来るだけ手を入れなかった。「書いていた

だけることがありがたく」、それだけで満足していた。俺が取捨選択すると言いながら、実際は十分な作品数がなく、遠慮しやすい運営してきたのだが、これが拙かったらしい。

アクトスは「一人でもやる」と決めて、スタートした。実際、第1号や2号の過半近くの作品は俺のものであった。

ところが会員が増えて原稿が集まり出すと、それが嬉しくて、俺自身が作品をアクトスに書かなくなつた。

単なるアクトスのオーナー・制作者であつて、創作者ではなくなつた。

良い作品集にするという、良い文芸創作の場にするという趣旨から逸脱して、ただたくさん載っていることだけに満足してきていた。

厳しいはずの創作の場が、褒めて、遠慮しつつ形だけ批評する場になつていたようだ。

(大変だ……)

大きな思いの塊が胸を突き上げる。

「神戸新聞にも出されたら」

また勧める。

地元の文芸祭とか、神戸新聞の文芸募集に入賞して、紙誌面に掲載されてはじめて、第三者が読むに耐える文章になつたのだと俺は考えている。

もともと、生まれて初めて『天井小僧』という作品が入選して、ハードカバーの本に収録されたのが俺の創作のスタートである。

『他人様が読むに耐える文章力と内容がある』というお墨付きだ。

それは他人が読んで感心したり、泣いたり、おもしろがつたりと、心を動かさせたからなので、客観的に「文学を創作している」範囲に入ったと言える。

8月の例会報告で

『「読み手を意識して書く事」と「書き手の意思を

貫く事」に関して、議論になったが、「誰がみてもそうだ」という解答のない、その多様性が文学というもの面白いところ』

という解説があつた。もちろん「読み手にわからない文章などは排除する」という暗黙の前提があつてのことなのだが、「書き手の意思を貫く事」だけの文章に拘泥されると、「なんでもあり」ということになる。改めて言うが、アクトスは「読み手に伝わらなければ意味はない」を目指している。

書き手がこだわつても伝わらねば個人の日記である。だから、アクトスを創設した時の考えを毎号の最初に『はじめに』としてあげてある。

「心に響く・心を動かす」ものが文学であつて、こだわりが伝わらねば文学ではない、という立場である。

(なるほど、ひよつとすると、その根幹部分が伝わっていない人がいるか……)

俺は改めて大きな息を吐き出した。

『読まれねば意味はない』というその意味で、世間の様々な文学募集にチャレンジして欲しい。

何度出しても、何年続けても入選しないのは、「大きな意味で面白くない」「文章が下手」「感性不足」「自己中心」だからである。

謙虚に自分の作品を見直し、削り、書き直ししないかぎり、発展はない。

そして、一般的に表現すると『初めは入選でもいが、入賞して欲しい』と思う。

というのは、「入選」「佳作」「文芸祭賞」といつても、各賞によつてその重みが様々であるからだ。

前述した、俺の最初の『天井小僧』は佳作である。が、実際は全応募作300編以上の児童文学作品の中から選ばれた19編の一編で、書籍に収録された。競争率16倍だ。

神戸新聞で「佳作」の場合は、作品は掲載され

ないで名前だけが載せられる。「入選」になると新聞紙面に作品が載る。

つまり各募集する団体によつて「入選」「入賞」「佳作」「○○賞」と言う名称の重みは様々なのである。

例えば、俺の小学館の「入賞」作は、2300編から選ばれた6編の最優秀・優秀賞の一編である。競争率は383倍だ。これは2年連続して受賞した。ラジオ放送もされて、詳細は省くが、当時無謀にも『東京に出て、これで食べようか』と考えたこともあつた。

さて、地元の文芸募集なら随筆や小説・児童文学では、20、30倍前後の競争率である。これでも大変なことだ。が、書き続け読み続けていれば技能と感性は伸び磨かれる。もちろん、何度も書き直し、削り直し、自分の作品を見つめて、悪い部分を直すという作業がないと駄目である。

ものをかく人に限らないが、特に文学をする人は、「自分のものが最高だ」と思い込む節が強い。

絵画もそうだが、スポーツと違いはつきりした基準がないからだ。

そうだからといって『俺のは素晴らしいのに人が認めないのだ』と思つても仕方がない。

確かに、時代に合わなくて生前に認められなかつた人もたくさんいる。俺の好きな宮沢賢治などもそうだが、それと自分を重ね合わせることは傲慢である。

幸い、現代では明石市文芸祭とか神戸新聞文芸とか、近くに自分のレベルを知る機会はたくさんある。

書いている素材、自分の考えていることが、如何に素晴らしくて、独創的で、劇的な経験であつたとしても、伝わらねば意味はない。

ここが大切なところである。

『人にわかりにくい創作をしておいて、時代に合わない』とすり替えてはならない。『好みが違う』『感性や考えが違う』と誤魔化してはならない。

もう一つ、自分のものが認められないのは「上の引き」がないからだというものもあるらしい。

良いものを書いているのに、選者の覚えがめでたくないので、選ばれない、と考えることだ。

確かにあり得る話だし、俺自身の社会経験からいって実際に見聞きしている。痛い目にも遭っている。

だが、文学の世界では、水準以上のものを書かないと、その「引き」さえ手に入らない。

因みに、明石市文芸祭などでは作品審査は「匿名」で行われる。つまり誰が書いたものかわからない状態で行われるという。

これは、通常の小説や随筆、児童文学などの募集では当たり前のことである。

短詩型の世界の一部などでは、「先生のひき」と「年功」がものをいうところもあると聞くが、文芸創作はそうであつてはならないと考えている。

素直に他人の目で自分の作品を見ることが出来ない、進歩はないと思う。

俺がTさん相手に、主に削る話を夢中になつて語っていると、3時18分にUさんが現れた。

例会は計4人となる。

中止の影も形もない。

俺もようやく胸をなで下ろして、Oさんの詩の作品合評に入る。ついつい熱が入りすぎて、残りの1時間40分は、この4編の詩の批評だけで終わってしまふ。

またまた、大変である。10号も11号も合わせると、あと十数編も掲載作が残っていて、9月と10月の例会しか時間がない。10月はひよつとする

と12号が出ているかも知れない。

(ふむ：、Uさんが総てを合評しようというのもあるが)

と考え込む。

11号で14編の作品がある。1ヶ月に一度、2時間の会合で5編の合評というのはきつい。

20枚程度のもものは時間がかかるので「例会で読まないで読んでおくこと」ともつともな意見が出た。が、実際はなかなか無理である。全員がその作品を共有しようとしたら、その場で再度頭に入れる必要がある。実際、この約束はご破算になった。

(ほつとした。なにせ俺など原稿の入力からして全員のものを読んでいるはずだが、忘れていたのである。痴呆症の気も強くなってきたらしい)

時間の延長という話も出たが、遠方からの方や

家事の用意という方もいる。

出席者だけのものに限るか、そして徹底して：、やり方を考えねばならない。

5時を過ぎて、Uさんから、「11月は第二土曜日に、Uさんも出られるらしい地域の会合が、コミセンの全室を使つて行われる」と教えられて、また「大変」が暴れ出した。

この会場は2ヶ月先の予約しか出来ない。早い者勝ちである。俺は今日、8月13日に、10月8日の予約をしたところだが、なんと、どうやら団体によつては3、4ヶ月先の予約も出来るらしい。

(そ、そんな：バナナ)

と思いかけて、それより、これはできる限り早く、会員に中止を伝えておかねばならないと心拍が高まりだした。

今日の「連絡していない、どうしよう」という中

止騒動が頭の中に根を張っている。

各自予定もあるし、勤務のある人もいる。

前のサンピアなら1年間の予約・支払いが出来て、このような心配は要らなかつたのだ。

(閉館とは運の悪い……)

とまた思い始めて、いやいや、こんなこともあるという良い経験が出来た？　と思ひ直すことにした。

とりあえず9月には伝えようと考えて、受付に向かった。

所長さんと女性職員は帰られて、夜間の人に交代している。

「11月はやはりだめですかねえ」

今日の部屋の使用料600円とエアコン使用料100円を支払いながら未練がましく言う。

職員は慌ててノートを繰り、総ての部屋が埋まっていることを確認して気の毒そうに頷いた。

因みに、今日の使用は改めて部屋の借用申込み書を書かなくてよくなった。お金を払ったので借用申込み書がないと整合性がとれない。だから、見つけたのであろう。

はて、借用申込み書は残っていて、使用だけが取り消されたのだろうか？

ちらりと疑問が頭に浮かんだが、まあ、追求しても仕方がない。

帰宅して、「大変だ」を改めてはき出した。

例年夏は暑いので出てくるのが大変なようである。私のように近場なら兎も角、電車や車で小一時間、明石駅から徒歩20、25分なんて言うのは確かに地獄に違いない。

サンピアも駅から徒歩12、3分だったが、半分はアーケードもあり、暑さも雨も多少しのげてこよりは行き来しやすかった。

駅前で本屋に寄ったり買い物もできた。

(飲み会もしやすかった：)

もつとも、アクトスは例会に参加する男性、Tさん、Sさんはほぼ飲まないし、S.iさんは車である。今まで参加した児童文学の団体はたいいてい二次会で盛り上がることが多かった。

(まあ、まじめに文学に取り組んでいる、といえれば：)

と考えて、思わず苦笑した。

合評も徹底してやるなら、総てに目を通すことは改める必要があるし、矛盾するようだが例会の回数を削つて、中身を濃くすることも一つの方法だろう。

第一、11月が中止なら、12号の合評は1、2回で済ませねばならないことになる。とてもではないが、全編の合評は不可能である。

会場も町の中心から離れ、毎回2ヶ月先を申し

込み、支払いが必要。11月のようにもつと以前から申し込みの出来るらしい優先団体の使用が入るとお手上げというのも不便である。

「もともと全市対象の施設ではなくて、あくまで衣川校区住民の施設だからなあ：」と思う。

9月にアクトスも設立から3年を迎えるので、もう一度原点に返つて考えてみる必要があるのかも知れない。

会員の3分の2は、俺の先輩、同僚、友達、親戚などである。発刊費用は実際上は赤字だが、それでもその殆どを名前だけ入つて下さつた方も支えて下さっている。

例会場、合評の内容と回数。会を立ち上げて、第1号を出した初心に戻つて「よし、思い切つて無手勝流でやり直し」とブルツと頭を振つた。
(大変でつせ：)

どこかでもう一人の俺がニヤツとしやがった。

了

昭和タイフーン 騒動記



永井組若芽

「昭和の匂いがする」つて若い子たちが口にするけれど、それはレトロつて言うことなのかな。

昭和つて六十四年もあつたし、戦前・戦中・戦後・高度成長、オイルショックがあつて、同じには語れないつて思うんだけど。

今は昔。昭和四十年代。大きな道路は舗装、小さな道はまだ土の道。観音開きのドアがついたテレビがあつたり、それに緞子やビロードの布が掛けられていたそんな時代。私が小学生の頃の話だ。

「二百十日」とはよく言つたもので、九月の上旬、台風がやつてくる。夏休みの終わり、二期の学期の最初、そして稲刈りのころ。

天気予報で台風が南の海に発生すると、父は「台風」という単語に敏感に反応した。それは、ちよつとはしゃいでいるようにすら見えた。子ども心に「お父ちゃん、台風好きやなあ」と思つたものだ。

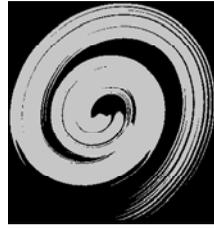
公共交通機関の運転士だったからだろうか。台風の進度、進路、気圧などの情報を注意深く確認していた。大きな台風の時は今より尚更だ。今はヘクトパスカルという単位だが、その当時はミリバルという単位だった。後二、三日ほどで台風がやってくるとなると、大急ぎで台風に対する備えに入る。

うちの周りに飛ぶものがないか確認する。もちろん物干し竿や植木鉢も片付ける。雨戸が飛ばないように、「カモイ」という長い板を外から釘で打ちつける。私のうちだけではなかつたはずだ。近所のどこの家からも釘を打つ音がしていた。

いよいよ、台風が接近すると、早めにご飯の準備に取り掛かる。メニューはおにぎり。そして当時は「ナンバ」と呼んでいた「トウモロコシ」を湯がいたもの。シンプルな料理と言うか、鍋一つでできるし、保存も効く。当時は台風がきたらすぐに停電したし、断水してしまうことも多かった。だから夕飯は早めに終わり早々に片付けられ、鍋、やかんにお水を貯める。お風呂もさっさと入ってしまう。マッチやロウソクが準備され、一階と二階に分かれて寝ていたが、いざというときのために一緒の部屋に布団を敷く。一歳違いの弟と布団にもぐり込んで、懐中電灯で顔の下から光を当ててお化けごっこだ。もう子どもはその頃にはハイテンション。明日は休校かもしれない。そんな淡い期待を抱いていたのだ。

「大風が吹いて寝られなくなるといけないからか、早く寝なさい」と母の雷が落ち、大人し

くなる。家が隣接していない北側と東側の風向きときは、家を「ばん！」と風が打ちつけ、揺れる。風の音に騒ぎながらも子ども私たちはいつの間にもやらすつかり寝入つてしまい、翌朝は決まったように「台風一過」の晴天だった。



台風が過ぎると打ち付けたカモイをはずし、片付けをする。落ち葉を掃きあつめたりしながら拍子抜けした気分になることもあつた。「あんなに大騒ぎをしたのに」。

そして台風が終わつたら楽しみになっていたことがあつた。海岸にいろんな物を拾いに行くのだ。瀬戸内に白波の余波をみることも楽しかつたし、砂浜にいろんな貝がらが流れ着いて、夏休みの工作に「貝殻の標本」を持つていったこともあつた。

最近では停電や、断水もほとんどなくなつた。バラックの家も見かけなくなつたし、林立するように建っているマンションの窓には雨戸がない。

年中行事の一環のように台風で備えていたあの頃とは違い。今は大きな台風と情報があつてもどこか「だいじょうぶやろう」と心のどこかで思う私がいる。

台風被害のテレビ映像を見ながら思い返す。

「あかん、あかん、自然は舐めたらあかん」。

※※※※※※※※※※※※※※※※

サンライフ明石は

国道2号線では、「竹鶴」前(信号あり)を南下し跨線橋を越えて下さい。

明姫幹線ではマックスバリユーを目標にどうぞ。

建物北に駐車場あり。建物入り口前に駐輪場。建物東にバイク置き場あり。

南が入り口(入つてすぐ左手で上履きにはきかえて下さい。会場は2階です。)

編集室から

①次号(第13号)の原稿締め切りは12月末。(※通常は月末必着ですが、年末ですので今回に限って1月7日必着でお願いします。)

②11月の合評会は、衣川コミセンが使用できないため中止します。ご注意ください。

尚、12月もおおごないません。

③前ページにありますように、

例会場を来年1月から、サンライフ明石に変更し、以後、奇数月の第3土曜日、午後1時半から2時間、に変更いたします。

ご注意ください。

変更・中止等の場合はHP掲示板、メール等でご連絡いたします。

④HPに、12号までを、一太郎ファイルで掲載しました。

<http://www.justmystage.com/home/actos2008/>

(ネット検索の窓から「文芸」□

アクトス」といれて探されても出てきません。)

「亥一郎」

◆競演◆
今回から「400字くらいコーナー」を新設しましたので競演は今号で中止いたします。短くても自由に創作して下さい。



◆入会するには◆

- ① 会費1年分(12000円)を下の振込先に振り込み
- ② 〒住所・氏名(フリカ`ナ)・年齢・職業・電話・メール
を明記の上、※振込用紙の通信欄記載でも可

〒673-0031 明石市宮の上1の17の614
大西方 アクトス編集室 へ、お送りください。

◆会費等振込先◆

郵便局

口座:00900-5-39616 大西 生一朗

※記録が残りますので、振り込みして下さい。

◆合評会

奇数月第3土曜日

※午後 1時半、

◆場所

中高年齢労働者福祉センター

(サンライフ明石)

〒673-0041

明石市西明石南町

3丁目1-21

電話 078-923-0770

※JR西明石駅南、徒歩3分

(新幹線西明石駅南徒歩5分)

※明石市立望海中学校・花園

小学校の西、徒歩1分

アクトス 第12号

平成二十三年十一月一日

編集 大西亥一郎

発行

〒673-0031

兵庫県明石市宮の上

一の十七の六一四

大西方

大和評論社「アクトス編集室」

Tel&Fax 078-922-4562

actos2008@mbe.nifty.com

非売品（頒価）800円
